

フィールドワーク便り

計画と現実のはざまにて

—南スーダンにおける開発実践の現場から—

徳岡泰輔*

南スーダンへ

2008年7月6日、ナイロビから飛行機で北に向かい、スーダンとの国境の町ロキチョギオへ。そこで一泊して次の日の朝、国連世界食糧計画が運航する便に乗りかえ、南スーダンの「首都」ジュバへ。さらに小さなセスナ機に乗りかえ、ルンベック、ワオ、そしてアゴックと小さな空港を離着陸し、ようやくマルワルコンに到着した。そこは雨季の真っ只中。私の予想を裏切り、緑に満ちていた。気温はそれほどでもないのだろうが、湿度が異常に高いことはすぐにわかった。息を吸い込んだとたんにむせ返りそうなくらい空気が濃く感じられた。空からまばらに小さく見えていた木々は、地上に降り立って見るとその多くが巨樹であることに気がついた。巨木の隙間を埋めるように、灌木が覆い茂っていて、人々の暮らしの空間だけが切り開かれていた。空港の滑走路は砂利で舗装されているが、周りは杭が打ち立てられているだけで、人や家畜が自由に行き来している。セスナ機が着陸したときだけは、そこを行き来していた人は滑走路を離れ、到着した人たちを見守るように「到着ロビー」周辺に集まっている

(写真1)。

マルワルコンは、スーダンの南西部に位置するノーザン・バル・アル・ガザール州にある小さな町だ。そこは、スーダン政府とスーダン人民解放軍がその領有権を争うアビエイや、最近ようやく注目されるようになったダルフルの南に位置する。この地域に住む人々はディンカと呼ばれる人々で、ナイル系ですらりと細い体型と高い身長が特徴だ。「到着ロビー」は無言で見守るディンカの人々に囲まれていた。これが、私が最初に見たスーダンの景色だった。いや、そもそもスーダンと呼ぶには、その地理的広さや現在の政治的情勢から正確ではないから南スーダ



写真1 マルワルコン空港

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ンと限定しておこう。私がこれから紹介するのは、広く、政治経済的に、そして民族、文化的に複雑なスーダンのほんの一部なのだ。

南スーダンに到着する約1カ月前まで、私は自分がここに来ることなどまったく予想だにしていなかった。私はそれまでバングラデシュにおける参加型開発実践の問題を、特に社会学・文化人類学的な視点から調査していた。およそ2年半の現地調査を終えて、博士論文の草稿も書き上げていた。しかし、博士論文の提出を前にして、調査者ではなく、実践者の立場から開発を見たいと考え、国際NGOで働くことにしたのだ。と、そう言いたいところだが、現実はそうではなかった。博士論文の草稿を書き上げたところまでは事実だが、論文の落としどころに納得がいかないまま研究は行き詰まり、経済的にも研究を続けていくには困難な状況にあったのが、そこにいた本当の理由だ。それだけではない。少しでも研究との接点をもっておきたいとバングラデシュ、できれば南アジア、それがだめでもせめてアジアでの就職を望んでいたが、職歴のない私にとって国際開発業界で仕事を得るのは至難の業であり、行く先や待遇についても選択の余地などなかった。やっと得た仕事がこの南スーダンの仕事だった。

復興支援と「継続する内戦」

私はあるNGOの南スーダン・プログラムのプロジェクト・アシスタントとしてマルワルコン事務所に着任した。プロジェクト・アシスタントである私の仕事は、主に国際協力事業団の資金援助によって運営される職業訓



写真2 職業訓練校の大工コースの様子

練校のプロジェクト・マネジメントであった。私は、現地の教育スタッフ、サンティノと相部屋で、職業訓練校内につくられたキャンプで生活することとなった（写真2）。

22年という長い内戦を経験していたスーダンの、しかもスーダンから独立しようとしていた南スーダンではあらゆる社会サービスとインフラが不足していた。職業訓練は、そうしたインフラ整備に必要な人材を養成するための重要なプロジェクトのひとつであった。ただ、その重要性は地域住民にはそれほど理解されているようではなかった。無料で、しかも全寮制で生活に困ることはない。しかし、応募してくる人の数は募集人員より少し多いくらいのものであった。この辺りには職業訓練校自体が存在しなかったのだから、理解されるまで時間がかかるのだらうと考えていた。

私たちが生活していた職業訓練校には、ジェネレーターが設置してあったが、それはたいがい不調で動いていなかった。夕方、勤務時間が終わると、キャンプにはソーラーパワールのランプがいくつかつくだけで、電源は

ないからパソコンを必要とする仕事はまったくできなかった。だから、私はディンカ・スタッフのサンティノとよく雑談をしていた。サンティノは30代前半で私と同年代であったが、その人生は私よりずっと波乱に満ちていた。12歳でエチオピアに送られ少年兵となり、歩いて南スーダンに帰ってきた。道中の食糧など渡されなかったから、サルなどの野生動物を食べて生き延びた。ディンカ社会にはサルを食べる習慣はないのだそうだ。南スーダンでは、サンティノの人生がユニークなわけではなかった。ローカル・スタッフの中には元兵士は他にもいたし、訓練生の中にもいた。

サンティノは将来政治家になりたいと考えていたからか、よく政治に関する話をしてくれた。スーダン政府と南スーダンは、2011年に分離か統一かを問う投票を行なうことになっていた。それほど遠くない未来だ。「やっぱりサンティノは分離を望んでいるの？」と私が聞くと、サンティノは「無論だ。これまでの仕打ちのうえにどうやって『北』と共存しろというのだ？」と答えた。「でも、投票で統一ということになったらどうするの？それに分離という結果になったとき、北がすんなり従うかな？」サンティノは答えた。「北が従わなければまた戦争に戻るさ。少なくとも私は構わない。」驚きを隠して私は続けた「そんなことになったら、いま私たちがこつこつとつくっているものはまた破壊されることになるだろうね。うちのNGOのここでの活動は今年で10年になると聞いているけど、それも数年で逆戻りになりかねないわけ

だ。」サンティノは笑って答えた。「つくってきたものを守るために不自由な生活を強いられたら意味がないじゃないか。」

紛争終結後間もないこの地域では、今でも各世帯に武器が保管してあるという。だから、皆がいつでも戦争状態に戻れるのだ。私は紛争後のこの地域に復興支援をしに来たつもりでいた。国際スタッフとの話題は、現在進行中のプロジェクトや現在不足している社会サービスを整備するために、今後どのようなプロジェクトが必要かといったことばかりだった。紛争に戻るリスクは計画書にあっても、実際には想像していない。少なくとも戦争をまるっきりしらない世代の私にとってはリアリティのない話だった。でも、この地域は紛争が終結した今でも、戦争状態から解放されているわけではないのだ。以前、ルワンダ人のスタッフがこんなことを言っていたのを思い出した。「22年ものあいだ内戦状態なんだ…。ディンカの若者は人生のほとんどを内戦状態で生きているわけだからな。彼らとはそれを理解したうえで付き合わなければ…」私に理解することなどできるわけがない。しかし、和平合意で平和に戻ったということのほうが、人生のほとんどを内戦状態で生きた人にとってはよっぽどリアリティのない話だろうことくらいは考えることができた。私たちが日頃つくっている長期的な目標を視野に入れた計画書など、地域住民にとっては私たちが思う以上に不安定な未来に違いない。職業訓練校への応募の少なさの背景にこのような事情があるのではないかと、私は思った。

牛耕トレーニング・プロジェクト

着任して3ヵ月が過ぎた10月から、私はプロジェクト・マネジャーに昇進し、南スーダン・プログラムすべての活動、すなわち教育、農業、マイクロ・クレジット、水衛生管理の部門と現地事務所の管理を担当することになった。そして、さまざまな場面で計画と現実のあいだで奮闘することになった。そのような例のひとつに、牛耕プロジェクトがあった。

2009年2月、緑の南スーダンは、私がここに来る前に写真で見た茶色のスーダンに変わりつつあった。乾季に入った南スーダンでは、室内温度で45度を超える日が続いていた。エアコンどころか扇風機もない事務所で、私は農業専門スタッフとローカル・スタッフの普及員たちと牛耕トレーニングの実施計画を立てていた。現地の状況について普及員から意見を聞いたうえで、農業専門スタッフと私は牛耕トレーニングを一部修正することを提案することにした。

これまでの研究によって、アフリカの一部の人々にとって牛は、その他の人々が考える以上の存在であることはすでに明らかにされてきた。たとえば、ディンカは一夫多妻制だが、妻は牛と交換されるため、牛の数だけ妻を娶ることができる。村である事件が起こり、罰せられた人は賠償金を牛で払うというのは一般的である。それ以外にも、特にローカル・スタッフから聞いた牛の詩とでも呼べる「ケーブ」という詩はとても興味深かった。ある牛について延々と歌い続けるのだ。それはある出来事について牛を絡めて語った

り、牛にまつわるある出来事を語ったりと語り方はいくつかあるようだったが、ある牛についての詳細が歌われるのだ。そのケーブを作る作詞家と歌う歌手もいる。そうした文化的活動を含めて、月並な言い方ではあるが、まさに牛はディンカの社会生活に埋め込まれていた。

そうしたディンカにとって、牛耕は抵抗のある農耕であった。多くの人は、大切な財産である牛を役畜として使いたくなかった。一方、これまで物の運搬に使われていたロバは、バスや車、トラックが入ってくることで用なしになり、ディンカ社会における伝統的役割を失いつつあった。そのため、ロバをもっている者は牛ではなくロバを使いたがった。ロバは牛ほど訓練するのに適していなかったが、すでにトレーニングを施し、ロバで耕起している農家もあった。彼らが望めば、牛でもロバでもよかったのである。それにもかかわらず、なぜか牛をトレーニングすることが推進されていた。私は、牛のトレーニングを目標として設定するのではなく、訓練する世帯数だけを目標にすることを提案した。あるいは、トレーニングの対象は牛でもロバでもよいということをプロジェクトに明記することを勧めた。プログラム・マネジャーはその点については反対しなかった。しかし、NGO運営側はなぜかそれに反対した。ある程度ロバを入れることには反対しなかったが、あくまで牛をもつ世帯を対象とするよう指示された。プロジェクトの意図とは裏腹に、結局集まったのはほとんどロバであった（写真3）。



写真3 牛耕トレーニングで、ロバにひかせる様子

埋まらない計画と現実を後にして

プロジェクトの現地レベルの実践にかかわっていると、さまざまな発見がある。状況の変化や地域住民とのインタラクションを通して気づくこともある。それは私が経験不足であったことや、長い間外部から閉ざされていた南スーダンという特異な状況ゆえかもしれないが、コンサルタントとして開発実践にかかわってきた研究者たちでさえ、実践過程におけるそうした流動的状況に対応する必要性を訴えている（たとえば、Mosse, D. 2005. *Cultivating Development: An Ethnography of Aid Policy and Practice*. London: Pluto Press). そうした実践過程における発見や変化をトップ・マネジメントやドナーに報告し、状況に合わせてその実践を変えていくことが現地レベルのマネジャーの仕事だと感じていたが、残念ながら多くのことが決められたとおりに実行し、現地レベルで起こる齟齬を埋め合わせるのが現地事務所の私たちの主な仕事となった。プロジェクトがいくつかの問題を抱えつつもうまくいっていることのみを報告し続けるのだ。なぜそんなことをする必要があ

るのだろうか。なぜ問題を率直にドナーや他の NGO と共有することができないのだろうか。私は現地事務所の代表者として国連機関や他の NGO とのコーディネーション・ミーティングに出席していたが、多くの場合それぞれの活動が報告されるだけのつまらないミーティングで、多くの共有していたであろう問題はなぜか個人レベルにおいてしか語られることがなかった。

私は南スーダンで勤務するあいだに書き上げた論文のひとつの中で、プロセス・ドキュメンテーションというモニタリング・ツールの有効性について論じた。その論文を書き上げたとき、私はあくまで調査者として特に現地住民の利益に重きを置いてその重要性を訴えた。しかし、今は開発介入者の立場からその重要性を実感している。私は自分の日記を書く習慣の延長に、プロジェクトの実践の記録をつけていた。そして、内部レポートにはさし障りのない程度に（その「程度」をつかむのにもかなりの時間を必要とした）その実感を反映させようと努めてきた。現地に来ることがめったにないプログラム・ディレクターや、ファンドレイジング・スタッフなどには、現地の状況がよく分かると好評だったが、それをドナーへのレポートに使うことはできなかった。ある程度現実を描くことに禁欲的だった私のレポートでも、ドナー向けに書くにはさらに慎重にならなければならなかったのだ。現地のプロジェクト・マネジメントのレベルで一緒に働き出した農業専門家は、着任して最初のレポートを、プロジェクトを評価するように現実をありのままに書き

て、専門家らしい提案を付けて上司に提出した。私はさすがに専門家らしいレポートだと感心していたが、上司たちにはひどく不評だった。現実があまりにも計画どおりにっていないことがありありと表現されていたからだ。計画と実践のギャップを埋めることの難しさを思い知らされるばかりで、結局私は南スーダンを出るまでそのギャップを埋めることには失敗していた。

私は結果的にこの NGO を辞めることになり、1 年の契約を終了する前に、新たにプロジェクト・マネジャーとして着任したスタッフに仕事の引き継ぎを行っていた。新しいプロジェクト・マネジャーはジャーナリス

ティックで記述の多い私のレポートのスタイルを改めて、マイルストーン・チャートという表を埋めていくレポート形式を導入した。レポートにあまり時間を費やす必要がなく、読むほうも一目でプロジェクトの進展状況が分かり、とても便利なシートだった。私は計画と実践のギャップが覆い隠されていくのを懸念しつつ南スーダンを後にして、私の「計画」を仕切りなおすことを考えることにした。しかしその一方で、南スーダンとの縁をこれで終わりにしたくはなかった。日本での「計画」を無事実現したら、私は南スーダンに戻りたいと帰りの飛行機の中で考えていた。

水害とその復興過程からフィリピン社会を考える

福 田 晋 吾 *

2009 年 9 月 26 日、フィリピンの首都マニラを台風 16 号（フィリピン名：オンドイ）が直撃し、過去最悪の水害をもたらした。特に、私の主調査地であるマリキナ市は、最も被害の大きい地域のひとつとなり、死者は優に 100 名を超え、行方不明者も多数に上った。自分自身はもちろん、多くの住民にとってもあれほどの洪水は初めてであり、一生忘れることができない苦い経験となった。

被災した人々には大変申し訳ないことに、

私自身は被害から免れた。当時、客員研究員として所属していたフィリピン大学（ケソン市）近辺に住んでおり、そこがたまたま小高い丘になっていて、洪水の水位が最高時でも 20 センチ程度でとどまったためであり、また当日マリキナに出掛ける予定だったが、急遽取りやめることになったためでもある。

私には、初めてフィリピンに到着してすぐ後の 1 か月間ホームステイをさせてもらい、その後も何かとお世話になっているマリキナ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科